

今朝の聖書の箇所は、7月18日(日)に「聖書を読む会」でも学びました。ルカによる福音書では「見失った羊の譬え」、マタイによる福音書では「迷い出た羊の譬え」となっています。「見失った」は羊飼いの立場から「迷い出た」は羊の立場から書かれています。99匹を残しておいても1匹を探しに行くという点は共通しています。2つの福音書がAD80～90年ごろローマ帝国によるキリスト教徒迫害の時代に書かれたことと深い関係がありそうです。

10節には「これらの小さな者を一人も軽んじないように気を付けなさい」と書かれています。この「小さな者」ミクロンは「価値の無い者」という意味です。1～9節で「こども」のことを「小さな者」と呼んでいます。そして「こども」パイディオンは「乳幼児」ブレーフオスではなく、集会中も歩き回り、迷惑をかけるギャングエイジのことです。そんな人を神様は大事にされるという意味です。自分は人のために重大な仕事をしていると思っている間は神様の導きや支えを見出すことは出来ないが、自分は罪深く無力な人間だと気が付けば、神様の導きや支えを見出すことが出来るということが「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることは出来ない」(3節)の意味です。

中国の戦国時代(紀元前403～211年)に楊朱(ようしゅ)という人が「多岐亡羊」と言いました。イエス様の時代のラビ(先生)と呼ばれた人々も律法の解釈を律法に等しく権威ある教えとして人々に語っていましたが、生活のために、性格のために、記憶力の欠如の為にそれらを守れない脱落者が多く生まれて、信仰的にも社会的にも失格者としてはじき出されていました。その人々を神様は見捨てないと言われたイエス様のお言葉が、ローマ帝国の迫害の時代に殺される恐怖から教会の交わりから遠ざかっている人々を神様は誰のことより心配しておられると言われたと福音書記者たちは理解したのです。

私の人生は「よき羊飼い」の絵に導かれた人生でした。漫画を画くことぐらいしか興味を持たない自分は失格人間だと思って落ち込んでいましたが、大事な時にいつも「よき羊飼い」の絵を目の前に表してくださり、慰め、励ましてくださいました。「一人のために」の「一人」こそ他の誰でもない私だと思います。そして、皆さまも「いや、一人のためには私のことだ」と考えておられると思います。私達はみんな大事な「一人の人」として今日まで生かされて来たことを感謝して生きていきましょう。